たかさご史話 ⑪

～謎の巨石　石の宝殿～

高砂市阿弥陀町の生石神社のご神体は不思議な巨大石造物で、石の宝殿とよばれています。高さ五・七m、横幅六・四m、奥行五・五mの直方体の背面に、屋根状または角状（つの）の突起を造りだし、家を横に倒したような形をしています。約五〇〇トンの巨石が拝殿の奥に鎮座するのは圧巻ですが、竜山石の岩盤を三方から掘り込んで、大石を掘り残したというのも驚きです。

『播磨国風土記』印南郡大国里の条は、この巨石のことを、伊保山西方の池之原の南に作石（つくりいし）があり、形は屋の如く、長さは二丈、広さ高さは各一丈五尺あり、聖徳王の御世に弓削大連（ゆげのおおむらじ）が造ったと伝えています。弓削大連とは、仏教の受容をめぐって蘇我馬子や聖徳太子と争った物部守屋のことですが、実際に守屋が石の宝殿を造らせたかどうかは不明といわざるをえません。

近年の研究では、奈良県橿原市にある益田岩船（ますだのいわふね）との類似から、石の宝殿は未完成の横口式石棺・石槨で、大和の王族か豪族のために造られたとする説が有力で、蘇我氏や斉明天皇の墳墓になるはずだったという見方もあります。

ただし、五〇〇トンもの巨石を運搬するのは並大抵ではなく、石の宝殿には石棺としての掘り込みが未確認なことから、突起部を石工の用いる鑿（のみ）や矢にみたて、石作集団のモニュメントとして作られたとする説も出されています。

大和へ運ぶ墳墓なのか、当地にそびえる記念碑なのか、議論はいまも続いています。

（高砂市史編さん専門委員　西本昌弘）